

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	ドイツの「教育のアンソロポロジー」の成果と研究手法に学ぶ
氏名 Name	XING SHUYU
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	教育学研究科・教育学環専攻・博士後期課程二年
渡航国 Country	ドイツ
渡航日程 Travel schedule	2024年 2月1日 ~ 2024年 2月21日

- ・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本計画の渡航目的は、ドイツの「教育のアンソロポロジー」からその研究成果および研究手法を学ぶことである。報告者の研究は贈与に関する教育人間学的研究であり、本計画は以下の二点において報告者の研究にとって有意義である。まず、ドイツの「教育のアンソロポロジー」の研究蓄積のなかで、自分の研究と関連が深い成果がある。そして、思想研究と実証研究を結びつけることについてドイツの研究蓄積から示唆を得ることができる。これらの成果を予想し、報告者は大学院教育支援機構(DoGS)海外渡航助成金を使用し、2024年2月1日から2月21日までドイツ・ドルトムント工科大学で本計画を遂行する。具体的に、渡航期間中に以下の研究活動を実施する：

1. 資料調達

ドイツの「教育のアンソロポロジー」の代表的な学者たち(C.ヴルフ、R.マティッヒ、J.ツィルファスなど)、及びその他ドイツ語で執筆する学者たちの研究成果を調査し、その中から自分の研究テーマを関りがある、且つ日本で入手困難なドイツ語文献を調達すること。

2. 研究交流

自分の研究内容を集中講義、ワークショップ、面談などの機会で開催し、その場にいる現地の研究者たちと意見交換すること。そして、研究手法、とりわけ思想研究と実証研究を結びつける質的研究法について学ぶこと。

成果 Outcome

渡航時に予想した目標を概ね達成できた。具体的には以下の成果を挙げた。

1. 自分の研究と関連が深いドイツ語文献を多数収集することができた。

自らの調査およびR.マティッヒ教授の紹介により、ドイツの「教育のアンソロポロジー」の研究蓄積において、とくに「情熱・熱狂」(Begeisterung)についての研究成果が自分にとって示唆が大きいことが明らかになった。これらの研究成果をドルトムント工科大学附属図書館で多数収集できた。また、教育学者ではないが、フランクフルト学派の哲学者 C.メンケの著作も自分の研究関心と近いものであるから調達した。これらの資料は、博士論文の完成に向けた論文執筆にとって不可欠である。

2. 研究手法について議論した。

報告者は質的研究手法について R.マティッヒ教授及び L.ヴィガー教授に相談し、ドイツの「教育のアン

ソロポロジー」で多用されるドキュメンタリー・メソッドとバイオグラフィー研究法を紹介された。しかし、これらの研究手法が必ずしも報告者の研究に適しているとは限らないという意見ももらった。マティツヒ教授によると、確かに報告者の研究は思想研究に偏るところがあるが、だからといって実証研究を組み込む必要があるとは限らない。これからは、このような意見を踏まえ、分量と論理の整合性を考慮したうえで論文の章立てを検討する予定である。

そして、予想しなかったが挙げられた成果もある。

3. 「異文化間教育学研究における翻訳の方法論的自覚」についての共同研究プロジェクト

報告者は渡航期間中に H.マセク博士が主催する集中講義「異文化間教育学とその方向づけ」(Interkulturelle Pädagogik und ihre Orientierung)に参加し、日本の異文化間教育学研究の変遷について発表した。これをきっかけに、マセク博士と共同研究と共著論文の執筆を計画した。共同研究のテーマは「翻訳の方法論的自覚」であり、質的研究におけるネイティブスピーカーだけを信用するイデオロギーに問題提起するものである。

今後の展望 Prospects for the future

今後の計画は以下になる：

1. 博士論文の完成に向けた研究活動：今回の渡航で得た知見に基づき、引き続き博士論文を執筆し、2025年度中に完成させる。
2. ドイツとの継続的な研究交流：これからもワークショップ、学会などの機会を利用し、日本の教育人間学とドイツの「教育のアンソロポロジー」の対話を継続させる。その一環として、2024年三月末に京都で開くドイツ・ドルトムント工科大学の研究者たちを招待するワークショップに参加する。
3. 共同研究及び共著論文執筆：マセク博士との共同研究プロジェクトを遂行し、長期的な研究計画を立てること。その第一歩として今参加している研究を完成させ、2024年7月までに学術誌に投稿する。